

ユークリッド空間に於けるベクトル積

平成 21 年 12 月

小澤 徹

<http://www.ozawa.phys.waseda.ac.jp/index2.html>

ユークリッド空間 \mathbb{R}^n に於ける $(n - 1)$ 個の元の成すベクトル積 (vector product, cross product) に就いて纏めて置こう。以下 $n \geq 3$ とし \mathbb{R}^n の元を

$$u = \begin{bmatrix} u_1 \\ \vdots \\ u_n \end{bmatrix}$$

の様に縦ベクトル表示する。 $(\vec{e}_j; 1 \leq j \leq n)$ を \mathbb{R}^n の標準基底とすると $u \in \mathbb{R}^n$ は

$$u = \sum_{j=1}^n u_j \vec{e}_j$$

と表される。 \mathbb{R}^n に於けるスカラー積を $u \cdot v \left(= \sum_{j=1}^n u_j v_j \right)$ とすると任意の $u \in \mathbb{R}^n$ は

$$u = \sum_{j=1}^n (u \cdot \vec{e}_j) \vec{e}_j$$

と表される。 \mathbb{R}^n に於けるノルム (ユークリッド的距離) を $|u| = \sqrt{u \cdot u}$ と表す。

1. ベクトル積の定義と基本的性質

$u_1, \dots, u_{n-1} \in \mathbb{R}^n$ を与えられた $(n - 1)$ 個のベクトルとする。 $v \in \mathbb{R}^n$ に対し n 個の縦ベクトル v, u_1, \dots, u_{n-1} を左から順に並べて n 次正方行列 (v, u_1, \dots, u_{n-1}) を考え、その行列式を $\varphi(v)$ とする:

$$\varphi(v) = \det(v, u_1, \dots, u_{n-1}) = (i_v \det)(u_1, \dots, u_{n-1})$$

行列式の性質により $\varphi: \mathbb{R}^n \ni v \mapsto \varphi(v) \in \mathbb{R}$ は線型となる。各 j に対し $\varphi(\vec{e}_j) \in \mathbb{R}$ であるから $u = \sum_{j=1}^n \varphi(\vec{e}_j) \vec{e}_j$ が \mathbb{R}^n の元として定まる。このとき任意の $v \in \mathbb{R}^n$ に対し

$$u \cdot v = \sum_{j=1}^n \varphi(\vec{e}_j) \vec{e}_j \cdot v = \sum_{j=1}^n \varphi(\vec{e}_j) v_j = \varphi \left(\sum_{j=1}^n v_j \vec{e}_j \right) = \varphi(v)$$

となる。このような u は u_1, \dots, u_{n-1} により一意的に定まる。実際もう一つの $u' \in \mathbb{R}^n$ が任意の $v \in \mathbb{R}^n$ に対し

$$u' \cdot v = \varphi(v)$$

を満たしているものとする $(u - u') \cdot v = 0$ となり $v = u - u'$ とする事により $u = u'$ が従う。

この u を u_1, \dots, u_{n-1} のベクトル積と謂い $u = u_1 \times \dots \times u_{n-1}$ と表す。
 即ち $u_1 \times \dots \times u_{n-1}$ は任意の $v \in \mathbb{R}^n$ に対して

$$(u_1 \times \dots \times u_{n-1}) \cdot v = \det(v, u_1, \dots, u_{n-1})$$

なる唯一つのベクトルであり $\varphi(\vec{e}_j) = \det(\vec{e}_j, u_1, \dots, u_{n-1})$ であるから

$$u_1 \times \dots \times u_{n-1} = \sum_{j=1}^n \det(\vec{e}_j, u_1, \dots, u_{n-1}) \vec{e}_j$$

と表される。

定理 1 $u_1, \dots, u_{n-1} \in \mathbb{R}^n$ に対して定まるベクトル積 $u_1 \times \dots \times u_{n-1}$ は次の性質を満たす。

- (1) (交代多重線型性) $\mathbb{R}^n \times \dots \times \mathbb{R}^n \ni (u_1, \dots, u_{n-1}) \mapsto u_1 \times \dots \times u_{n-1} \in \mathbb{R}^n$
 は交代 $(n-1)$ 重線型写像である。
- (2) (零ベクトル積の特徴付け)

$$u_1 \times \dots \times u_{n-1} = 0 \Leftrightarrow u_1, \dots, u_{n-1} \text{ は線型従属}$$

$$u_1 \times \dots \times u_{n-1} \neq 0 \Leftrightarrow u_1, \dots, u_{n-1} \text{ は線型独立}$$

- (3) (ベクトル積の直交性) $u_1 \times \dots \times u_{n-1} \in (\text{span}(u_1, \dots, u_{n-1}))^\perp$
 即ち $1 \leq j \leq n-1$ なる任意の j に対し $(u_1 \times \dots \times u_{n-1}) \cdot u_j = 0$
- (4) (ベクトル積の長さ)

$$\begin{aligned} |u_1 \times \dots \times u_{n-1}|^2 &= \det(u_1 \times \dots \times u_{n-1}, u_1, \dots, u_{n-1}) \\ &= \det \begin{bmatrix} u_1 \cdot u_1 & \cdots & u_1 \cdot u_{n-1} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ u_{n-1} \cdot u_1 & \cdots & u_{n-1} \cdot u_{n-1} \end{bmatrix} \end{aligned}$$

即ち $(n-1)$ 個のベクトルの成すベクトル積の長さは対応する $(n-1)$ 次グラム行列の行列式の根に等しい。

- (5) (線型変換に関するベクトル積の変換則) $A \in M(n; \mathbb{R})$ に対し

$${}^t A((Au_1) \times \dots \times (Au_{n-1})) = (\det A)(u_1 \times \dots \times u_{n-1})$$

特に $A \in GL(n; \mathbb{R})$ に対し

$$(Au_1) \times \dots \times (Au_{n-1}) = (\det A) {}^t A^{-1}(u_1 \times \dots \times u_{n-1})$$

特に $A \in O(n; \mathbb{R})$ ならば ${}^tAA = I$ となるので上の等式は

$$(Au_1) \times \cdots \times (Au_{n-1}) = (\det A) A(u_1 \times \cdots \times u_{n-1})$$

となり $\det A$ は 1 か -1 のどちらかの値を取る。

証明 (1) と (2) は等式 $u_1 \times \cdots \times u_{n-1} = \sum_{j=1}^n \det(\vec{e}_j, u_1, \cdots, u_{n-1}) \vec{e}_j$ 及び行列式の性質から従う。

(3) $(u_1 \times \cdots \times u_{n-1}) \cdot u_j = \det(u_j, u_1, \cdots, u_{n-1})$ より従う。

(4) $u_0 = u_1 \times \cdots \times u_{n-1}$, $A = (u_0, u_1, \cdots, u_{n-1}) \in M(n; \mathbb{R})$ とすると

$$|u_0|^2 = u_0 \cdot u_0 = \det(u_0, u_1, \cdots, u_{n-1}) = \det A$$

であるから

$$\begin{aligned} |u_0|^4 &= \det A \cdot \det A = \det {}^tA \cdot \det A = \det {}^tAA \\ &= \det \begin{bmatrix} {}^tu_0 \\ {}^tu_1 \\ \vdots \\ {}^tu_{n-1} \end{bmatrix} [u_0, u_1, \cdots, u_{n-1}] \\ &= \det \left[\begin{array}{c|ccc} {}^tu_0u_0 & {}^tu_0u_1 & \cdots & {}^tu_0u_{n-1} \\ \hline {}^tu_1u_0 & {}^tu_1u_1 & \cdots & {}^tu_1u_{n-1} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ {}^tu_{n-1}u_0 & {}^tu_{n-1}u_1 & \cdots & {}^tu_{n-1}u_{n-1} \end{array} \right] \\ &= \det \left[\begin{array}{c|ccc} u_0 \cdot u_0 & 0 & \cdots & 0 \\ \hline 0 & u_1 \cdot u_1 & \cdots & u_1 \cdot u_{n-1} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ 0 & u_{n-1} \cdot u_1 & \cdots & u_{n-1} \cdot u_{n-1} \end{array} \right] = |u_0|^2 \det(u_i \cdot u_j) \end{aligned}$$

となり (4) が従う。

(5) n 次正方行列 $A = (a_{ij})$ の転置行列 tA を

$$(Au_1) \times \cdots \times (Au_{n-1}) = \sum_{j=1}^n \det(\vec{e}_j, Au_1, \cdots, Au_{n-1}) \vec{e}_j$$

の両辺に作用させると

$$\begin{aligned} {}^tA((Au_1) \times \cdots \times (Au_{n-1})) &= \sum_{j=1}^n \det(\vec{e}_j, Au_1, \cdots, Au_{n-1}) {}^tA \vec{e}_j \\ &= \sum_{j=1}^n \det(\vec{e}_j, Au_1, \cdots, Au_{n-1}) \sum_{i=1}^n a_{ij} \vec{e}_i \\ &= \sum_{i=1}^n \left(\sum_{j=1}^n a_{ij} \det(\vec{e}_j, Au_1, \cdots, Au_{n-1}) \right) \vec{e}_i \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
&= \sum_{i=1}^n \det\left(\sum_{j=1}^n a_{ij} \vec{e}_j, Au_1, \dots, Au_{n-1}\right) \vec{e}_i \\
&= \sum_{i=1}^n \det(A\vec{e}_i, Au_1, \dots, Au_{n-1}) \vec{e}_i \\
&= \sum_{i=1}^n \det(A(\vec{e}_i, u_1, \dots, u_{n-1})) \vec{e}_i \\
&= \sum_{i=1}^n (\det A)(\det(\vec{e}_i, u_1, \dots, u_{n-1})) \vec{e}_i \\
&= (\det A)u_1 \times \dots \times u_{n-1}
\end{aligned}$$

となり (5) が従う。

2 . 外積代数との関係

V を実ベクトル空間、 V^* をその双対空間とする。 $k \in \mathbb{Z}_{\geq 0}$ に対し $\bigwedge^k V^*$ を $V^k = V \times \dots \times V$ から \mathbb{R} への交代多重線型写像全体の成すベクトル空間とする：

$$\begin{aligned}
\bigwedge^0 V^* &= \mathbb{R} \\
\bigwedge^1 V^* &= V^* \\
\bigwedge^k V^* &= \{\omega : V \times \dots \times V \rightarrow \mathbb{R}; \omega \text{ は交代多重線型}\}, \quad k \geq 2.
\end{aligned}$$

$\alpha_1, \dots, \alpha_k \in V^*, k \in \mathbb{Z}_{>0}$ に対し $\alpha_1 \wedge \dots \wedge \alpha_k \in \bigwedge^k V^*$ が

$$(\alpha_1 \wedge \dots \wedge \alpha_k)(v_1, \dots, v_k) = \det(\alpha_i(v_j))$$

で定まる。以下 V は有限次元とする。 $n = \dim V$ とし (e_1, \dots, e_n) を V の一つの基底とする。 $1 \leq i \leq n$ に対し e_i^* を $e_i^*(e_j) = \delta_{ij}$ で定まる V^* の元とする。 (e_1^*, \dots, e_n^*) は V^* の基底を成す。実際、任意の $\alpha \in V^*$ は $v = \sum_{j=1}^n v_j e_j \in V$ に対し

$$\alpha(v) = \alpha\left(\sum_{j=1}^n v_j e_j\right) = \sum_{j=1}^n v_j \alpha(e_j) \in \mathbb{R}$$

なる値を持つが $v_i = e_i^*(v) \in \mathbb{R}$ なので

$$\alpha(v) = \sum_{j=1}^n e_j^*(v) \alpha(e_j) = \left(\sum_{j=1}^n \alpha(e_j) e_j^*\right)(v)$$

とも表される。 v は任意であったので

$$\alpha = \sum_{j=1}^n \alpha(e_j) e_j^*$$

と表される。即ち (e_1^*, \dots, e_n^*) は V^* の生成系である。 (e_1^*, \dots, e_n^*) が線型独立であることは、その任意の線型結合に対し各 e_j 上での値を取る事によって示される。 $1 \leq k \leq n$ なる k を一つ与えるとき $1 \leq i_1 < \dots < i_k \leq n$ なる組 (i_1, \dots, i_k) は $\binom{n}{k}$ 個存在する。

$$(e_{i_1}^* \wedge \dots \wedge e_{i_k}^* ; 1 \leq i_1 < \dots < i_k \leq n)$$

は $\bigwedge^k V^*$ の基底を成す。実際、任意の $\alpha \in \bigwedge^k V^*$ は $u_1, \dots, u_k \in V$ を $u_i = \sum_{j=1}^n (e_j^*(u_i)) e_j$ を表しておくとの等式

$$\begin{aligned} \alpha(u_1, \dots, u_k) &= \alpha \left(\sum_{j_1=1}^n e_{j_1}^*(u_1) e_{j_1}, \dots, \sum_{j_k=1}^n e_{j_k}^*(u_k) e_{j_k} \right) \\ &= \sum_{j_1=1}^n \dots \sum_{j_k=1}^n e_{j_1}^*(u_1) \dots e_{j_k}^*(u_k) \alpha(e_{j_1}, \dots, e_{j_k}) \\ &= \sum_{\ell_1 < \dots < \ell_k} \sum_{\sigma \in \mathfrak{S}_k} e_{\sigma(\ell_1)}^*(u_1) \dots e_{\sigma(\ell_k)}^*(u_k) \alpha(e_{\sigma(\ell_1)}, \dots, e_{\sigma(\ell_k)}) \\ &= \sum_{\ell_1 < \dots < \ell_k} \sum_{\sigma \in \mathfrak{S}_k} \text{sgn}(\sigma) e_{\sigma(\ell_1)}^*(u_1) \dots e_{\sigma(\ell_k)}^*(u_k) \alpha(e_{\ell_1}, \dots, e_{\ell_k}) \\ &= \sum_{\ell_1 < \dots < \ell_k} \det(e_{\ell_i}^*(u_j)) \alpha(e_{\ell_1}, \dots, e_{\ell_k}) \\ &= \sum_{\ell_1 < \dots < \ell_k} (e_{\ell_1}^* \wedge \dots \wedge e_{\ell_k}^*)(u_1, \dots, u_k) \alpha(e_{\ell_1}, \dots, e_{\ell_k}) \\ &= \left(\sum_{\ell_1 < \dots < \ell_k} \alpha(e_{\ell_1}, \dots, e_{\ell_k}) e_{\ell_1}^* \wedge \dots \wedge e_{\ell_k}^* \right) (u_1, \dots, u_k) \end{aligned}$$

が得られるので

$$\alpha = \sum_{1 \leq i_1 < \dots < i_k \leq n} \alpha(e_{i_1}, \dots, e_{i_k}) e_{i_1}^* \wedge \dots \wedge e_{i_k}^*$$

と表される。即ち $(e_{i_1}^* \wedge \dots \wedge e_{i_k}^* ; 1 \leq i_1 < \dots < i_k \leq n)$ は $\bigwedge^k V^*$ の生成系である。更にこれが線型独立であることは、その任意の線型結合に対し $1 \leq j_1 < \dots < j_k \leq n$ なる各 (j_1, \dots, j_k) について $(e_{j_1}, \dots, e_{j_k})$ 上での値を取る事によって示される。

以上により $0 \leq k \leq n$ なる k に対し

$$\dim \bigwedge^k V^* = \binom{n}{k}$$

であり、その基底は $(e_{i_1}^* \wedge \dots \wedge e_{i_k}^* ; 1 \leq i_1 < \dots < i_k \leq n)$ で与えられる事が証明された。特に $k = n - 1$ の場合 $\dim \bigwedge^{n-1} V^* = n$ であり任意の $\alpha \in \bigwedge^{n-1} V^*$ は

$$\alpha = \sum_{j=1}^n \alpha(e_1, \dots, \overset{j}{\cdot}, \dots, e_n) e_1^* \wedge \dots \wedge \overset{j}{\cdot} \wedge e_n^*$$

と表される。また、 $k = n$ の場合

$$\dim \bigwedge^n V^* = 1$$

であり任意の $\alpha \in \wedge^n V^*$ は

$$\alpha = \alpha(e_1, \dots, e_n) e_1^* \wedge \dots \wedge e_n^*$$

と表される。

さて $\wedge^k V^*$ が V と同じ次元 n を持つ場合は $k = 1$ 及び $k = n - 1$ 即ち V^* 及び $\wedge^{n-1} V^*$ に限られる。そこで V と V^* 及び $\wedge^{n-1} V^*$ との関係に就いて考えよう。

先ず n 次元ベクトル空間 V が内積 \cdot を持つ場合を考えよう。 $v \in V$ に対し $b_1 v \in V^*$ が $(b_1 v)u = v \cdot u$, $u \in V$ で定まる。 $u, v \in V, a \in \mathbb{R}$ に対し

$$\begin{aligned} (b_1(u+v))w &= (u+v) \cdot w = u \cdot w + v \cdot w = (b_1 u)w + (b_1 v)w \\ &= (b_1 u + b_1 v)w, \\ (b_1(au))w &= (au) \cdot w = a(u \cdot w) = a((b_1 u)w) = (a(b_1 u))w \end{aligned}$$

が任意の $w \in V$ に対し成立つので $b_1 : V \ni v \mapsto b_1 v \in V^*$ は線型写像となる。任意の $\alpha \in V^*$ は V の \cdot に関する正規直交系 (e_1, \dots, e_n) を取れば

$$v = \sum_{j=1}^n \alpha(e_j) e_j$$

なる $v \in V$ により $\alpha = b_1(v)$ と表されるので b_1 は全射であり

$$b_1(v) = 0 \Leftrightarrow v \cdot u = 0 \quad \forall u \in V \Leftrightarrow v = 0$$

より b_1 は単射である。よって $b_1 : V \rightarrow V^*$ は線型同型を与える。

さて内積を持つ n 次元ベクトル空間 V として \mathbb{R}^n の場合を考えよう。 $v \in \mathbb{R}^n = V$ に対し $b_{n-1} v \in \wedge^{n-1} V^*$ が $b_{n-1} v = i_v \det$ 即ち

$$(b_{n-1} v)(u_1, \dots, u_{n-1}) = (i_v \det)(u_1, \dots, u_{n-1}) = \det(v, u_1, \dots, u_{n-1})$$

で定まる。 \mathbb{R}^n の標準基底を $(\vec{e}_1, \dots, \vec{e}_n)$ とし $v = \sum_{j=1}^n v_j \vec{e}_j$ と表すと

$$\begin{aligned} (b_{n-1} v)(\vec{e}_1, \dots, \vec{e}_n) &= \det(v, \vec{e}_1, \dots, \vec{e}_n) \\ &= \sum_{j=1}^n v_j \det(\vec{e}_j, \vec{e}_1, \dots, \vec{e}_n) \\ &= v_j \det(\vec{e}_j, \vec{e}_1, \dots, \vec{e}_n) \\ &= (-1)^{j-1} v_j \det(\vec{e}_1, \dots, \vec{e}_n) = (-1)^{j-1} v_j \end{aligned}$$

となるから

$$\begin{aligned} b_{n-1} v &= \sum_{j=1}^n ((b_{n-1} v)(\vec{e}_1, \dots, \vec{e}_n)) e_1^* \wedge \dots \wedge e_n^* \\ &= \sum_{j=1}^n (-1)^{j-1} v_j (e_1^* \wedge \dots \wedge e_n^*) \end{aligned}$$

と表される。 $(e_1^* \wedge \cdots \wedge e_n^*; 1 \leq j \leq n)$ は $\wedge^{n-1}(\mathbb{R}^n)^*$ の基底なので

$$b_{n-1}: \mathbb{R}^n \rightarrow \wedge^{n-1}(\mathbb{R}^n)^*$$

は線型同型である事が従う。

定理 2 (ベクトル積と外積との関係) 任意の $u_1, \dots, u_{n-1} \in \mathbb{R}^n$ に対し $\wedge^{n-1}(\mathbb{R}^n)^*$ に於ける次の等式が成立つ:

$$b_{n-1}(u_1 \times \cdots \times u_{n-1}) = (b_1 u_1) \wedge \cdots \wedge (b_1 u_{n-1})$$

(証明)

$$b_{n-1}v = \sum_{j=1}^n (-1)^{j-1} v_j (e_1^* \wedge \cdots \wedge e_n^*)$$

に於いて $v = u_1 \times \cdots \times u_{n-1}$ とすると v の第 j 成分は

$$v_j = \vec{e}_j \cdot v = \vec{e}_j \cdot (u_1 \times \cdots \times u_{n-1}) = \det(\vec{e}_j, u_1, \dots, u_{n-1})$$

$$= (-1)^{j-1} \det(u_1, \dots, \vec{e}_j, \dots, u_{n-1})$$

$$= (-1)^{j-1} \det \begin{bmatrix} u_{11} & u_{21} & \cdots & u_{n-1,1} \\ u_{12} & u_{22} & \cdots & u_{n-1,2} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ u_{1n} & u_{2n} & \cdots & u_{n-1,n} \end{bmatrix} < j$$

\downarrow

$$= (-1)^{j-1} \det \begin{bmatrix} u_{11} & u_{12} & \cdots & u_{1n} \\ u_{21} & u_{22} & \cdots & u_{2n} \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ u_{n-1,1} & u_{n-1,2} & \cdots & u_{n-1,n} \end{bmatrix}$$

\downarrow

$$= (-1)^{j-1} \det \begin{bmatrix} u_1 \cdot \vec{e}_1 & u_1 \cdot \vec{e}_2 & \cdots & u_1 \cdot \vec{e}_n \\ u_2 \cdot \vec{e}_1 & u_2 \cdot \vec{e}_2 & \cdots & u_2 \cdot \vec{e}_n \\ \vdots & \vdots & & \vdots \\ u_{n-1} \cdot \vec{e}_1 & u_{n-1} \cdot \vec{e}_2 & \cdots & u_{n-1} \cdot \vec{e}_n \end{bmatrix}$$

$$= (-1)^{j-1} ((b_1 u_1) \wedge \cdots \wedge (b_1 u_{n-1})) (\vec{e}_1, \cdots, \vec{e}_n)$$

故に

$$\begin{aligned}
 & b_{n-1}(u_1 \times \cdots \times u_{n-1}) \\
 &= \sum_{j=1}^n (-1)^{j-1} (u_1 \times \cdots \times u_{n-1})_j (e_1^* \wedge \cdots \wedge e_n^*) \\
 &= \sum_{j=1}^n \left(((b_1 u_1) \wedge \cdots \wedge (b_1 u_{n-1})) (\vec{e}_1, \dots, \vec{e}_n) \right) (e_1^* \wedge \cdots \wedge e_n^*) \\
 &= (b_1 u_1) \wedge \cdots \wedge (b_1 u_{n-1})
 \end{aligned}$$

3 . 超平面の面積要素と法線ベクトル

n 次元実ベクトル空間 V の二つの基底 (e_1, \dots, e_n) と (e'_1, \dots, e'_n) は同じ向きにあるとは $(e'_1, \dots, e'_n) = (e_1, \dots, e_n)P$ なる $P \in GL(n; \mathbb{R})$ をとるとき $\det P > 0$ である事を謂い、反対の向きにあるとは $\det P < 0$ である事を謂う。これにより V の基底は二つのクラスに分けられる。この二つのクラスの各々を V の向きと謂う。 V が向き付けられているとは、その二つのうち一つを指定する事と定義される。 \mathbb{R}^n の基底 (e_1, \dots, e_n) は標準基底 $(\vec{e}_1, \dots, \vec{e}_n)$ と同じ向きにあるとき正の向きと謂い、反対の向きにあるとき負の向きであると謂う。

命題 $u_1, \dots, u_{n-1} \in \mathbb{R}^n$ は線型独立であるとするとき次の (i)-(iii) を満たす $v \in \mathbb{R}^n$ が唯一存在する：

- (i) $|v| = 1$
- (ii) 任意の j に対し $v \cdot u_j = 0$
- (iii) (v, u_1, \dots, u_{n-1}) は正の向きの基底を成す。

(証明) u_1, \dots, u_{n-1} は線型独立なので $|u_1 \times \cdots \times u_{n-1}| \neq 0$ となる。そこで $v = u_1 \times \cdots \times u_{n-1} / |u_1 \times \cdots \times u_{n-1}|$ とすれば (i), (ii) はベクトル積の基本性質から従い (iii) は $\det(v, u_1, \dots, u_{n-1}) = |u_1 \times \cdots \times u_{n-1}| > 0$ から従う。 $\dim(\text{span}\{u_j; 1 \leq j \leq n-1\})^\perp = 1$ であるから (i)(ii) を満たす v は \pm の符号を除いて一意的に定まり (iii) によりその符号のどちらかが定まる。これより一意性が従う。

定理3 V を \mathbb{R}^n の向き付けられた $(n-1)$ 次元部分空間とし、それ自身を内積空間と考える。

- (1) 次を満たす $\omega \in \wedge^{n-1} V^*$ が唯一存在する：
 V の任意の正の向きの正規直交基底 (u_1, \dots, u_{n-1}) に対し $\omega(u_1, \dots, u_{n-1}) = 1$
- (2) 次を満たす $v \in \mathbb{R}^n$ が唯一存在する：
 V の任意の正の向きの正規直交基底 (u_1, \dots, u_{n-1}) に対し (v, u_1, \dots, u_{n-1}) は \mathbb{R}^n の正の向きの正規直交基底となる。

(3) (1) の $\omega \in \wedge^{n-1} V^*$ と (2) の $v \in \mathbb{R}^n$ は次の関係を満たす :

$$\omega = i_v \det$$

これにより v と ω とは一対一に対応する。 $v = \sum_{j=1}^n v_j \vec{e}_j \in \mathbb{R}^n$ に対して ω は

$$\omega = \sum_{j=1}^n (-1)^{j-1} v_j (e_1^* \wedge \cdots \wedge e_n^*)$$

と表され $\omega \in \wedge^{n-1} V^*$ に対して $v \in \mathbb{R}^n$ は

$$v = \sum_{j=1}^n (-1)^{j-1} (\omega(\vec{e}_1, \dots, \vec{e}_n)) \vec{e}_j$$

と表される。

証明 (1) (v_1, \dots, v_{n-1}) を V の正の向き of 正規直交基底の一つとし

$$v = v_1 \times \cdots \times v_{n-1} / |v_1 \times \cdots \times v_{n-1}|, \quad \omega = i_v \det$$

と置く。このとき $\omega \in \wedge^{n-1} V^*$ であり任意の正の向き of 正規直交基底 (u_1, \dots, u_{n-1}) に対し $(u_1, \dots, u_{n-1}) = (v_1, \dots, v_{n-1})P$ なる $P \in O(n-1; \mathbb{R})$ を取ると $\det P = 1$, $v \cdot u_j = 0 (1 \leq \forall j \leq n-1)$ であるから

$$\begin{aligned} (\det(v, u_1, \dots, u_{n-1}))^2 &= \det \left(\begin{bmatrix} {}^t v \\ {}^t u_1 \\ \vdots \\ {}^t u_{n-1} \end{bmatrix} [v, u_1, \dots, u_{n-1}] \right) \\ &= |v|^2 \det(u_i \cdot u_j) = 1 \end{aligned}$$

となる。 (v, v_1, \dots, v_{n-1}) を (v, u_1, \dots, u_{n-1}) に変換する n 次正方形行列の行列式は 1 となるから (v, u_1, \dots, u_{n-1}) は正の向きを与える。従って

$$1 = \det(v, u_1, \dots, u_{n-1}) = (i_v \det)(u_1, \dots, u_{n-1}) = \omega(u_1, \dots, u_{n-1})$$

一意性は $\dim \wedge^{n-1} V^* = 1$ である事と向きの指定より従う。

(2) (v_1, \dots, v_{n-1}) を V の正の向き of 正規直交系の一つとし

$$v = v_1 \times \cdots \times v_{n-1} / |v_1 \times \cdots \times v_{n-1}|$$

とすれば良い。

(3) これ迄の議論から得られる。

参考文献 : 杉浦光夫、解析入門 II、東京大学出版会
スピバック、多変数解析学、東京図書

R. Abraham, J. E. Marsden, T. Ratiu, Manifolds, Tensor Analysis, and Applications, Springer

J. J. Duistermaat and J. A. Kolk, Multidimensional Real Analysis, Cambridge